

Practical Activities to Develop Public Speaking Ability for Undergraduate International Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fukasawa, Nozomi, Fukagawa, Miho メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062727

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践報告

学部留学生対象のパブリックスピーキング能力を育成するための実践活動

深澤 のぞみ^{注1}・深川 美帆^{注2}

要 旨

大学の学部留学生には、従来のアカデミック・ジャパニーズに加え、21世紀型スキルの養成を目指す新たな大学教育の内容に対応できる力を持たせることが必要である。そこで本稿では、現代に重視されるパブリックスピーキング能力を、総合的に学べる実践活動を報告する。具体的には、留学生たちが旅行会社のインターンとなり、「訪日旅行客が求める体験型ツアーの提案」をグループで考え、それについてのプレゼンテーションを行う活動である。受講した留学生からのフィードバックには、この活動全体への高い評価や、グループ活動への積極的な評価が現れていた。外国人留学生対象の日本語授業にも、新しい教育観を反映していく努力が必要だと思われる。

【キーワード】パブリックスピーキング アカデミック・ジャパニーズ 21世紀型スキル

I. 日本語教育と21世紀型スキルとしてのパブリックスピーキング

グローバル化や科学技術の進展により、現在人々は知識や情報を簡単に手に入れることができる。しかしそれは、知識や情報そのものにはあまり価値がなく、取得した知識や情報を用いていかに新しい価値を創造していくかが重視されるようになったことを意味する。そのため21世紀を生き抜くための教育には、従来の方法を超越する内容が必要とされるようになり、大学教育にも変化が現れている。新しい時代を生き抜くために必要なスキルを定義したものである21世紀型スキルにはいくつかの種類があるが^{注3}、共通した特徴には基礎的な知識の他にICT(情報伝達技術)のスキルやコミュニケーション、協働を重視していることが挙げられる。そして現代の大学ではこの21世紀型スキルを意識したアクティブラーニング^{注4}などを教育に取り入れることが多くなっており、外国人留学生に対する日本語教育もこの動きに対応することが必須の状況となっている。

また日本政府は外国人留学生の日本での就職を推進する方針を打ち出しており^{注5}、単なる日本語教育だけを大学で実施するのではなく、外国人留学生の進路まで見据え社会人としての活躍ができるような教育を行うことが期待されているのである。

さらに現在世界では、AI(Artificial Intelligence)に奪われる仕事と残る仕事話題になっており、日本でも野村総合研究所がAIに代替される可能性が高い日本国内の仕事100種と、代替可能性が低い仕事100種を発表した(野村総合研究所 2015)。これを見ると、単純な作業や、マニュアル化しやすい内容などの仕事はAIに代替されやすく、抽象的な概念を扱う仕事、他者の理解を確認したり、コミュニケーションをしたりして行う仕事は代替されにくいということがわかる。つまり他者との協働やコミュニケーションの経験や訓練が大学教育の中でも必要であり、それは留学生対象の教育でも例外ではないということになる。

日本語教育は従来、口頭コミュニケーションを重視し、スピーチやプレゼンテーションなどのパブリックスピーキング教育を熱心に進めてきている。この方針は21世紀型スキル養成を目指す現在の教育方針にも適合することである。そして深澤(2017)では、この目的のために「ビブリオバトル」^{注6}の活動を日本語授業に取り入れることが、21世紀型スキルに関連するスキルの養成につながると指摘した。具体的には実際に教室で行われた「ビブリオバトル」の活動の録音録画記録を分析し、「ビブリオバトル」を教室活動に取り入れることが、日本語学習者の情報検索や思考のスキル、さらには自分の考えを他者に伝え、互いに交流しながら理解を促進する能力を養成するための要素が多く含まれていることを検証している。

しかし「ビブリオバトル」は基本的に「独話のコンテスト」という性質が強く、この活動の中で自分から自らの考えを発信したり他者の考えを理解したりするコミュニケーション能力については養成されるが、21世紀型スキルで重視されている「他者との協働」のスキルがどう養成されるのかについては述べられていない。

そこで本稿では、パブリックスピーキングの能力養成のための活動に、21世紀型スキルの「他者との協働」を深めるための要素を組み込んだ実践について報告し、その成果と課題を検討していくことにする。

II. 学部留学生対象のパブリックスピーキング能力の養成

1. 学部留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ

大学で学ぶ外国人留学生のためには、一般的な日本語教育だけでは不十分で、大学での学びに合わせた、いわゆるアカデミック・ジャパニーズの教育が必要だと言われ

ている。アカデミック・ジャパニーズには、学術的な内容を理解し、大学での試験や口頭発表、論文作成などに対応できるためのスキル養成が含まれている。しかし前述したように、昨今の大学では21世紀型スキルが重視され、通常の授業の中でもコミュニケーション力を駆使しながら学生同士の協働によって課題発見から課題解決を目指す教育が行われるようになっており、従来のアカデミック・ジャパニーズの内容を学ぶだけでは十分でなくなってきた。このため、外国人留学生、とりわけ大学の学部にて正規生として1年次から入学してくる外国人留学生に対するいわゆるアカデミック・ジャパニーズの教育は、新しい大学教育の流れに沿ったものである必要があり、内容が学術的なものであったとしても、単なる読解や作文の授業では十分にカバーできないと言える(深澤他 2017)。しかし具体的にどのような教育実践を行えばよいのかについては、まだそれほど多くの知見があるとは言えない。

2. パブリックスピーキングと21世紀型スキル

日本語教育はもともとコミュニケーション重視の教授法が取られてきており、現在実施されているアクティブラーニングとも親和性が強いが、パブリックスピーキングの能力を養成するための活動について言えば、必ずしも相互的なコミュニケーションや他者との協働と結びつけることは容易ではない。パブリックスピーキングというのは基本的には「独話」であり、話すための準備も実施も一人で行うのが原則であるからである。またパブリックスピーキングの聴衆の側となる学生にとっても、授業の一環として行われるスピーチやプレゼンテーションがいつも自分の興味に叶った内容が話されるとは限らないため、他の学生のスピーチをあまり集中して聞くことをせず、自分のスピーチを上手に行うことだけを考えてしまうといったことも起こりがちである。

このような問題に対応するのに、聴衆による投票を取り入れている「ビブリオバトル」は有効な活動となり得る(山路他 2013)。また大島他(2012)が提唱するように、タスクとしてのピア活動を行いながらプレゼンテーションを完成していくという考え方やその実践例(藤田・フランプ 2009)も出てきた。

3. 学部留学生のためのパブリックスピーキング養成教育

学部の正規留学生^{注7}は日本人学生と同じ科目を履修し単位を取得する必要がある。外国人留学生用の日本語科目は外国語科目などとして準備されていることが多いと思われるが、最近では英語科目も重視されている上に、日本人学生とはほぼ同じだけの科目の履修をしていく必要があるため、海外の協定校からの交換留学生^{注8}などのように日本語の科目だけを多く履修することは通常は難しい。そのためにも、週に1コマか

ら2コマ程度の日本語科目の中で、大学で学ぶために必要なアカデミック・ジャパニーズ、例えばノートの取り方や専門書の読み方等の上に、パブリックスピーキングの指導も含めなければならないという状況がある。また、交換留学生にとっても、日本において専門分野の科目を履修し、母校の大学で日本語で卒業論文を執筆したり、また、卒業後に日本の大学院への進学を志す者もいる。こうした学生にとっても、アカデミック・ジャパニーズの教育は必要不可欠である。

本稿での実践は、このような条件のもとで、アカデミック・ジャパニーズの一つとしてパブリックスピーキングの養成をはかり、かつ同時に21世紀型スキルの養成も実現し、学部留学生の将来にも貢献できることを意図したものである。

Ⅲ. 学部留学生対象のパブリックスピーキング能力の養成の実践活動

本稿での学部留学生対象のパブリックスピーキング能力養成のための教育実践の概要を以下に述べる。

1. 本実践の目的

前節でも述べた通り、本実践はプレゼンテーション活動を行うものである。具体的には旅行会社のインターン達が「訪日旅行客が求める体験型ツアーの提案」として10分程度のプレゼンテーションを行い、社員らの投票によって採用ツアーを決めるという想定で行う活動である。

現在の大学の教育は学生のコミュニケーション能力を高め、自ら発信する力をつけることを重視するため、教師が大人数の教室で一方的に講義を行うという従来型の授業はあまり推奨されず、授業の中で議論をしたりその結果を口頭発表したりと、アクティブラーニングの要素が含まれた授業が増えてきている。そのため、外国人留学生であっても日本語でのプレゼンテーション能力の養成は、欠かせない教授項目である。しかしだからと言って、これまでの日本語教育でよく行われてきた「スピーチ大会」や自分の国や専門についての「プレゼンテーション発表会」^{註9}を行わせるだけでは、このような必要性には対応できない。そこで本実践では、ゴールはプレゼンテーションの実施だが、活動の中にはプレゼンテーションだけではなく、情報検索などを効果的に行うことや、他者との協働などの21世紀型スキルに含まれる要素も多く含むようなデザインにすることを目指した。

2. 実践活動の概要

実践を行った授業は、国内の国立総合大学の学部留学生の初年次日本語科目(学部正規外国人留学生にとっては必修科目、交換留学生にとっては日本語科目)であり、週1コマ90分授業で、試験を含め16回行われるものである。2017年および2018年、2019年前期後期に渡って実施した。受講者は2017年が18人、2018年が20人、2019年の前期が20人、後期が26人であった。漢字圏学習者が多いものの非漢字圏学習者も含まれ、全員が日本語能力試験のN2以上またはそれと同等の日本語力を有している留学生である。受講者の専門分野は、文系と理系の双方であり、どの分野にも大きい偏りがない。本稿での実践は、この科目の全16回のうちのおよそ3回分を当てた「プレゼンテーションをする」という実践活動についてである。この授業の教授者は筆者らで、それぞれ前期と後期を単独で担当した。

筆者らが担当を開始した約10年前から、大学留学生対象のアカデミック・ジャパニーズを扱う教科書を使用していたが、読解だけの内容や学術文の作成だけの内容ではこの授業のニーズに十分に答えられないことや、受講する留学生の日本語力が全般的に高くなり、かつ大学全体の教育目標も変わっていったため、独自作成の教材を使用するようになった^{注10}。

この実践を実施した年には、アカデミック文章の特徴やノート・コメントシートやレジュメの作成、情報検索や情報読み取りの方法、要約・引用の方法、プレゼンテーションの方法、論理の構成方法とそれを元にしたレポートの書き方を扱った。ここで報告するのはプレゼンテーションの方法の部分である。

3. 本実践の内容の詳細

本実践のプロセスは、テーマのインプット、プレゼンテーションの仕方、グループ作りとグループでの討論(提案の内容や分担決め)、個人作業、プレゼンテーション、全員での投票から成る。各プロセスについて以下に述べていく。

3.1 テーマのインプット

最初に、活動の内容を説明する。この授業の受講学生が旅行会社のインターンであると想定し、インターンがグループを作り「訪日旅行客が求める体験型ツアーの提案」を考えて、10分程度のプレゼンテーションを行う。その後、旅行会社の社員およびインターンの投票によって採用ツアーを決めるという想定で行う活動であることを説明する。

次にテーマのインプットを行う。本実践のテーマは「訪日旅行客が求める体験型ツ

アの提案]であるが、このテーマに関するインプットを与えるために「爆買いより体験 大都市より地方」(読売新聞2017年1月9日の記事)を読ませ、訪日旅行客の求めるものの変化や具体例などのインプットを与え、同時に必要な語彙や表現などを学ばせる^{注1)}。

3. 2 プレゼンテーションの仕方

プレゼンテーションの具体的な仕方について説明を行う。プレゼンテーションの構成や箇条書きの方法などを含むスライドの作り方、プレゼンテーションに必要な表現、効果的な話し方や態度などである。

3. 3 グループ作りとグループでの討論

プレゼンテーションは一人一人が行うのではなくグループで行うため、まずグループ作りをする。くじ引きで4つないし5つのグループに分ける。その後、グループごとに提案する体験型のツアーについて日本語を用いて話し合いを行い、さらに「体験型のツアーの概要(名称, 対象者, 場所, 費用など)」「ツアーの期待される効果」「ツアー実施の課題」などについて、グループのメンバーで討論する。プレゼンテーションの内容や使用スライドの全体像を検討した上で、分担を考える。

なお、グループ活動の途中で、教員が机間巡視しグループ毎に進捗状況を確認したり、活動を進める中で出てきた学生からの疑問に答えたりするなどした。

3. 4 個人作業

グループでの討論は基本的には授業内で行い、その後は個人でも情報検索などを進めた上で、再び次の授業内で討論を続ける。

体験型ツアーの概要や名称、対象者などが決まり、分担が決まったら、それぞれスライドを作成し、プレゼンテーションで話す内容も考えて練習も各自行う。

3. 5 プレゼンテーションの発表会と投票

プレゼンテーションの発表会を実施し、1グループ10分程度のプレゼンテーションと質疑応答を行った。実施学期によってプレゼンテーションの方法には少し差があったが、基本的にはグループのプレゼンテーションと質疑応答から成る。表1に実際に行われた内容を示す。

表1 プレゼンテーションのタイトル

*は投票の結果、その年の採用ツアーに選ばれたことを表す

2017年	<ul style="list-style-type: none"> ・関西で食い倒れ! ・A date with the stars by the sand in Tottori ～星漠でのデート～* ・北海道でスキーと民宿を楽しもう! ・ほっと石川旅 ・彩ツアー：伝統イキイキの京都にて ・日本文化体験ツアー 	2018年	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿児島 愛に会う ・沖縄 文化体験* ・奈良へようこそ 農業体験 ・雪国の旅 ・北陸 夏限定 体験ツアー
2019年 前期	<ul style="list-style-type: none"> ・瀬戸内めぐり ・瀬戸内海海島シリーズ* ・温泉街で五彩の世界と出逢おう ・京都の文学散歩 ・Golden Stream Tour ・祭りに集まれ 	2019年 後期	<ul style="list-style-type: none"> ・北国のロマンチック 札幌&小樽 3日間 ・Let's go 二次元に入ろう! -秋葉原- * ・江ノ島満喫の旅 ・北陸・新潟の冬を体験しよう! ・心を和らげ、日本の故郷へ 信州ツアー ・「忍者修行」の旅 -文化、自然と忍者修行の体験- ・ユニーク カンサイ IN HAND ・四国の島々を満喫 -瀬戸内の楽園! 人気の難雄島への旅! ・学問の神様はあなたを守ってくれる! -北野天満宮- ・東洋のハワイ 沖縄

最後に旅行会社の社員およびインターンとの想定のもとでクラス全員が投票を行う。得票数が多かったグループの提案が、採用ツアーとなる。表1中には、採用ツアーとして選ばれたものに*を付した。

IV. 考察

本節では、この実践の成果と課題について述べていく。

1. 学生からのフィードバック

本節では、学生へのプレゼンテーション終了後のアンケート調査を本格的に実施した2019年前期と後期の結果をもとに(表2)、学生からのフィードバックの内容について述べていく。

表2 学生のアンケート結果

上段2019年前期18人、下段2019年後期24人

	授業全体	グループ活動	発表会
大変役立つ	5 (27.8%)	3 (16.7%)	7 (38.9%)
	4 (16.7%)	3 (12.5%)	5 (20.8%)
役立つ	12 (66.7%)	12 (66.7%)	8 (44.4%)
	19 (79.2%)	13 (54.2%)	15 (62.5%)
普通	1 (5.6%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
	5 (4.2%)	7 (29.2%)	4 (16.7%)
あまり役立たない	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	0 (0%)	1 (4.2%)	0 (0%)
全く役立たない	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

まず、プレゼンテーションの課の授業全体について役に立ったと思うかどうかをたずねたところ、「大変役に立つ」と「役に立つ」が前期も後期もほとんどを占めており、学生はこの学習活動が役に立ったと考えていることがわかった。コメントには、「授業のおかげで、よいプレゼンテーションが出せました。」「授業でプレゼンテーションを作る役に立った情報をととも勉強になりました。」「主題が面白くて、やる気がある。」など、テキストも含め、授業内容について満足していることがわかる。また「GS科目^{注12}ではプレゼンが多いので役立った。チーム活動も役立った。これからもプレゼンが多くなるので、よい経験だった。」というコメントもあり、学士課程の初年次に受講する科目にもプレゼンテーションが重視され課されている現状に、有益だったと感じていることがわかる。

次に、グループ活動についてどうだったかたずねたところ、「大変役に立つ」と「役に立つ」が7割以上であり、高い評価を得ていることがわかる。自由記述の中には、「みんなの意見をまとめることは難しいけど面白かった」「チームワークで発表することは今までで、いい体験だと思います。そして、みんな協力することで、良い人間関係も構築できます。その過程で、自分の日本語コミュニケーション能力も磨けます。」「グループ活動を通して他人の知識や情報を得られたのは貴重な機会だった。」といったコメントがあり、協働で課題を達成するための困難さを経験しつつ、学習を進めていったことがわかる。一方で、「グループのコミュニケーションがうまくいかないことがあった。この支援が必要。」という声もあり、グループ活動がそれほど簡単にうまくいくわけではないこともわかる。

3回目の授業で行った発表会についても、8割の学生が「大変役に立つ」「役に立つ」と答えている。コメントからは「このプレゼンテーションの授業のおかげで、聴衆に

もっとわかりやすいプレゼンテーションの作る方法を身につけました。また、発表するときの言い方とマナーなども明らかにしました。」といったものもあった。「発表会で自分の欠点を知ることができた。」というコメントからは、発表会で自分の能力を相対的に把握することができたことを示していることになる。

この学習活動で特徴的なフィードバックとしては、アカデミック・スキルを養成することを目的としているが、テーマである「インバウンドに向けての魅力的な日本ツアーの企画」という、学生自身が興味を持つものであり、準備から発表までの過程に意欲的に取り組めた点である。これは「(この活動を通して)いろいろな観光地を知った」「プレゼンテーションを作るため、いろんな資料とか地図とかを調べてまるで自分が旅行するつもりのような気がします。とても楽しいです。」といったコメントからも窺える。また、このコメントからは、この活動に先立って学習した、情報検索や図表の解釈などのアカデミック・スキルを応用し、この活動の課題を達成した様子が窺える。

またプレゼンテーションの聞き手としても、能動的に活動に参加できており、中には、もう少しグループ毎の発表時間を長くして、詳しく説明したらもっと楽しめるだろう、というコメントもあった。このように、発表するばかりでなく、聞き手としての立場も主体的に経験できたことで、コメントに、「発表者たちから発表の技術と質問に対する答え方を勉強しました。」といったものもあり、聞き手を意識した効果的な発表とはどのようなものか気づいた学生もいた。また、トピックがいわゆるフォーマルなアカデミックなものとは一線を画したことが、発表者にとっては、発表原稿に縛られずに聞き手を意識して話そうとすることにつながったようで、「原稿無しでの日本語の発表は初めてかもしれないので、大変良い経験となったと思う。」というコメントも見られた。

2. 成果

成果の一番大きいこととして挙げられるのは、学部留学生対象のアカデミック・ジャパンーズを扱う授業の中で、21世紀型スキルで重要と思われるパブリックスピーキングの養成を行い、かつその完成までのプロセス中に、互いに議論しながら協働をしていくというスキルの育成も図れたことである。パブリックスピーキングの能力を養成すること自体はこれまでも日本語教育の中で多くなされていることであるが、通常はスピーチやプレゼンテーションの発表会での個人ごとの発表が最終ゴールとなり、授業内外での指導は担当教師と受講生の個人指導が中心で、ゴールに到達するまでに長い時間がかかることが多い。しかし限られた時間内に大学で学ぶためのアカデミック・

ジャパニーズの養成が必要な学部留学生のケースでは、それほどの時間を割くことなく、必要な事項をカバーできるようにすることが必要になる。本実践の方法では、一人一人が発表することもでき、かつそのプロセスにはICTを使いこなすことや他者との協働など、他の21世紀型スキルの要素も含んだ形で経験することができることになるのである。

具体例を見ていくと、例えば2017年における鳥取砂丘に行くツアーは、砂丘(砂漠)と満天の星空を「星漠」という言葉で表現したものであり、また2018年は沖縄でのいくつかの文化を実際に体験するというツアーで、どちらもグループでの討論がうまく進み、その結果、発表もスライドも効果的に作られているものであった。グループでの討論では、候補となる場所を出し合い、話し合いの中から候補地を絞り、あるいはいくつかを入れ込む形での計画にし、情報を検索したり議論をしたりしながら具体的な肉付けをしていった。

また分担を決めた後は、個人作業として発表するための原稿を作りスライドの箇条書きに表していくが、またそれを教室に持ち寄り、互いに修正することを行った。ここで受講生は協働の仕方を体験することができたと言える。

プレゼンテーション後の質疑応答も、受講生たちは皆旅行者のインターンや社員であるという設定の中で活発に行われた。

3. 課題

課題として挙げられるのは、グループ活動を実際の発表まで持つていくことの難しさである。グループのメンバーが話の進め方の手順も含め、いろいろなアイデアを出していく中で、それをどうまとめ一つの内容にしていくか、というところにどのグループも時間がかかっていた様子である。興味深かったのは、グループメンバーの意見に「そうですね」と(日本人同士の話し合いの時のように)同意を示しながらも、気になる点を指摘して話を発展させているグループも少なくなかったことである。相手の意見を踏まえて、議論を重ねていく、という様子が観察された。

一方で、相手の意見を踏まえて議論を進めるのがうまくいかないケースもあり、担当者である筆者らが介入せざるを得ないケースがいくつかあった。原因を特定するのは容易ではないが、同じようなグループ活動を日本人学生に行わせると活発な意見が出ないために皆黙ってしまうようなケースがよくあるのに対し、この授業では様々な文化に属する留学生のグループ活動への多様な参加方法が原因で討論が止まってしまったケースと言えるかもしれない。例えば、自分の意見を強硬に通そうとする受講生がいて、他のメンバーも譲らず調整が進まないまま討論が止まってしまいうケースや、日

本語力がやや低い学生の発言に対して厳しく間違いや不足を指摘する学生がいたりしたことであった。

本実践では、グループによる協働に関して注意点を挙げたりコツを伝授したりすることをしなかったため、受講生がこのような状態に対処できず問題化してしまった可能性がある。また日頃仲良くしているメンバーでグループを作ればこのような問題を回避できるのかもしれないとも考えたが、社会生活の実際の場面では、よく知らない人や考え方や文化背景の違う人とも協働して仕事をしていかなければならないことも多いことを踏まえると、どのようなグループの作り方がよいのかは検討の余地がある。

V. 結論

本稿は、あまり多くの時間を日本語の授業に割くことができない学部留学生に対する日本語教育の中で、アカデミック・ジャパニーズの指導を行い、かつ大学教育の中で重視されるパブリックスピーキング能力を育成しながら、21世紀を生きるのに必要とされるスキルも同時に経験することを実現できる実践活動について報告を行った。

昨今の大学はアクティブラーニングを重視し、日本語教育の科目以外でも、従来のような知識伝授型の内容だけで授業を行うことは少なくなってきた。しかしアクティブラーニング型の活動を行うのには時間がかかり、従来と同じ授業項目を扱わなければならないとすると工夫が必要となってくる。今回の実践で行ったように、一つの活動の中に様々な要素を入れ込み、それらが有機的に機能するようにすることを目指してデザインするのは一案だと考えられる。

外国人留学生対象の日本語授業は、ともすると従来通りの日本語教育の内容を行っていれば十分だという考えに陥りやすいが、学部留学生が大学の授業での21世紀型スキル養成を目指す活動にすぐに適応することができるように、日本語教育でも新しい教育観に敏感になり、日本語の授業に反映していく努力が必要なのではないかと感じている。

【謝辞】

本稿はJSPS科研費(「グローバル化時代のパブリックスピーキングにおける「説得」の諸相」JP16K02807, 研究代表者: 深澤のぞみ)の助成を受けた。

【注】

1. 金沢大学人間社会学域国際学類
2. 金沢大学国際機構
3. ATC21s (Assessment and Teaching in 21st Century Skills) という政府や大学、企業などから構成させる団体が提唱しているものや、キーコンピテンシー、社会人基礎力などが挙げられる。
4. アクティブラーニングというのは、中央教育審議会が2012年に発表した用語集によると、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことであるとされている。
5. 「外国人留学生の就職支援」https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/job/_icsFiles/afieldfile/2018/12/05/01_ryuugakusei_monkasyou.pdf (2020年3月3日アクセス)。
6. ビブリオバトルというのは、自分が推薦する本について5分のプレゼンテーションを行い、聴衆の投票によって「チャンプ本」(1位になった本)を選ぶという書評ゲームのことである。
7. 私費外国人特別選抜などの入学試験を受けて入学し、学士の学位取得を目的として大学の学部で学ぶ留学生を指す。
8. 海外の協定校から半年または1年間日本の大学に留学する学生を指す。本稿では、前述の正規の留学生と交換留学生を合わせて、学部留学生と呼ぶ。
9. 本稿では、スピーチとプレゼンテーションをスライドなどのビジュアルエイドを使うか否かで使い分ける。
10. この期間に試作版教材として使用していた教材は、後に深澤他(2018)として刊行された。
11. この内容も深澤他(2018)に収録されている。収録されている教材ではグループ活動を行うことは指示されていないが、この内容を基にグループでの活動を行った。
12. GS科目というのは、筆者らが勤務する大学独自の教育方針である「金沢大学<グローバル>スタンダードに基づいて考案された授業科目で、学士課程の基礎的な共通科目として学生が受講すべき科目を指す。

【参考文献】

- 大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子(2012)『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション—プレゼンテーションとライティング』ひつじ書房
- 中央教育審議会(2012)用語集(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf 2019年5月2日アクセス)
- 野村総合研究所(2015)「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に」https://www.nri.com//media/Corporate/jp/Files/PDF/news/newsrelease/cc/2015/151202_1.pdf 2019年4月28日アクセス)
- 深澤のぞみ(2017)「日本語教育におけるパブリックスピーキング—21世紀に必要な学びの一つとして—」『金沢大学留学生センター紀要』第20号, pp.1-19
- 深澤のぞみ・札幌寛子・濱田美和・深川美帆(2017)「大学初年次留学生のためのアカデミックジャパニーズ総合教材の開発」2017年度日本語教育学会春季大会ポスター発表
- 深澤のぞみ・濱田美和・深川美帆・札幌寛子・松田佳子・藤井晶子(2018)『21世紀のカレッジ・ジャパニーズ—大学生のための日本語で読み解き、伝えるスキル』国書刊行会
- 藤田朋世・フランツ順美(2009)「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み—重慶大学での実戦報告—」『世界の日本語教育』19, pp.199-213
- 山路奈保子・須藤秀紹・李セロン(2013)「書評ゲーム「ビブリオバトル」導入の試み—日本語パブリックスピーキング技能育成のために—」『日本語教育』155号, pp.175-188

Practical Activities to Develop Public Speaking Ability for Undergraduate International Students

FUKASAWA Nozomi, FUKAGAWA Miho

Abstract

In addition to traditional academic Japanese skills, international undergraduate students must adapt to the new content of university education aimed at cultivating 21st century skills. This article reports on practical activities that enable international undergraduate students to learn public speaking skills comprehensively, which society emphasizes today. This was a specific practical activity : the groups of international undergraduate students propose a new “Experiential Tours for Foreign Tourists” and present on the tours as interns at a travel agency. The international undergraduate students who took the course evaluated the overall activities highly and evaluated the group activities positively. Japanese language instructors must try to reflect the new view of education in Japanese classes for foreign students.